



ロータリーは機会の扉を開く

RI 会長：ホルガー・クナーケ

2620 地区ガバナー：荒山 弘樹

会長：上村 計介 幹事：内山 義之 会場監督：栗原 伸人

例会：毎週金曜日 19:00～20:00

グランドホテル浜松 〒432-8507 浜松市中央区東伊場 1-3-1 Tel: 053-450-3003 Fax: 053-450-3006

E-Mail: hamamatsu-naka@ri2620.gr.jp

2021年2月5日（金） 晴 第1549回例会 週報 NO. 17

会：川合弘高 会場監督補佐
点 鐘：上村計介 会長
国歌「君が代」斉唱
ロータリーソング「奉仕の理想」

会長挨拶



先ほど、竹山さんのお母様のお通夜でお悔やみを申して参りました。

今日は岩田会員の卓話を楽しみにしております。いつも会員の皆さまの体験に基づいたお話で、いろいろな職種のことを聞いて勉強になります。

先日地区の RLI を卒業し、今月のガバナー月信に卒業者として名前が載りました。RLI は皆様ご存じだと思いますが、まだ始まったばかりです。6 時間を 3 回受けて終了となります。初回は静岡のアザレアに行きました。受講者は 80 人くらいいたと思います。その後はオンラインになり、わからないので息子についていてもらい、苦労しました。最後は 30 人くらいの受講者でしたが、10 名の卒業者に入ったのでホッとしました。聞いているだけならいいのですが、生徒も発表しなければならず、しどろもどろでした。

今後も RLI は続きますので、皆さんもご参加ください。

幹事報告



- ・ 配布資料 ロータリーの友
抜粋のつづり
寄付金領収書
- ・ 回 覧 ガバナー月信
ロータリー手帳注文
- ・ 理事会で江崎さんの退会が受理されました。

委員会報告

☆公共イメージ向上委員会
委員長代理 内山義之 幹事
後期のファイヤーサイドミーティングは3月2日（火）～5日（金）にリアル開催とオンライン開催の2つで行います。リアルは1グループ4名にして志ノ蔵で行います。オンラインは4日若しくは5日で、食事はケータリングします。但し飲み物は自前です。

後ほど、希望を伺いに参ります。

米山奨学金授与



☆MD マフムデュル ハサンさん
先週から新しい論文を書いています。あと 2 週間くらいで完成させてオンラインで出したいと思います。

癌の研究は 9 月まで続きます。今月は米山のレポートもあります。19 日には鬼頭先生に出たいと思います。

誕生日祝い

川合 弘高さん	16 日
藤野 匡司さん	19 日
井田 一芳さん	20 日
金子 芳保さん	22 日
ハサンさん	1 日



スマイル

♪上村計介さん、内山義之さん

本日は岩田直也会員が「弁護士は何故悪い人を弁護するか」と言う卓話をしてくださいます。能弁家の岩田さんのお話は大変楽しみです。



会員卓話：岩田直也会員
「弁護士はなぜ悪い人を
弁護するのか」

進行：川井啓介 出席委員長



岩田さんは38歳。東京生まれで和歌山育ち。慶応大学法学部卒業後、明治の大学院を経て、24歳で司法試験に合格。現在は田畑・岩田法律事務所所属。静岡県弁護士会浜松支部幹事、今年の4月からは静岡県弁護士会の副会長に就任予定だそうです。

*** **

★岩田直也さん



弁護士登録をしてから14年目に入ります。

お陰さまで、浜松中 RC をはじめ、たくさんの人と知り合うことができ、様々なことを教えて頂きながら楽しく仕事できています。私の方も色々なご質問をいただきますが、定番の質問は、①弁護士は儲かるか、②弁護士はモテるか、③弁護士は六法全書を覚えているのかの3つです。これらの答えは簡単です。①儲かりません、②モテません、③覚えていません。

もう一つよく聞かれる質問があります。これはこれまでとは異なり難問で、「弁護士はなぜ悪い人を弁護するのか？」というものです。毎日のように誰かが逮捕され裁判が開かれたという報道があります。その中には罪を認めている被告人もいれば、無罪を主張して被害者に対して不誠実だと非難されたりする人もいます。その全てに弁護人がついてるわけですが、それは法律上、弁護人がいないと

裁判が開けないことになっているからです。

では、それは何故か？明らかに罪人、悪人であれば弁護人など不要にした方が良くはないですか？皆さんはそう思われたことはないでしょうか？

そこで今回はズバリそれをテーマにお話してみたいと思います。これは、私が司法修習生の頃、有名な刑事弁護士から自分なりの答えを見つけておくようにと指示されていたテーマでもあります。今は刑事弁護から離れてしまいましたが自分なりの考えをお話してみます。色々な考え方があるので、あくまで私見ということでお聞き頂けると幸いです。

さて、ある所にAさんとBさんがいます。Aさんは所持していた拳銃でBさんを射殺しました。Aさんは何罪でしょうか？

銃刀法違反？それもそうですが答えは殺人罪。「人を殺した者は、死刑又は無期もしくは5年以上の懲役に処する。」刑法199条に書いてあります。昔は5年ではなく3年以上でした。他の罪でも刑は重くなっていて、逆に軽くなったという話は聞きません。税金と刑罰は重くなる…大変な時代です。

ではAがBを射殺しようとした時、Bも今まさにAに狙いを定めて拳銃を撃とうとしたところでAはそれに気づいてBを撃った。この場合どうなるか？これは正当防衛ですね。刑法199条の「人を殺した者」にあたるけれども違法ではない。難しい言い方をすると「違法性阻却事由」と言い、結論は無罪です。

さらに今度は、AがBを撃とうとした時、BもまさにAに向けて拳銃を撃とうとしていた。でもAはBに狙われていることを知らなかった。つまり、客観的には正当防衛の状況だけれども、Aはその状況に気づいてなく偶然に正当防衛になった…これを偶然防衛と言うのですが、その場合はどうなるのか？

これは「違法」の本質をどう考えるかに関わる奥の深い問題です。二つの大きな考え方があります。「違法とは客観的に悪い結果が生じている状態のこと」という考え方では

Aを殺そうとしていたBの死というのは別に悪い結果ではない。だから正当防衛でAを無罪としなくて良いという結論になります。一方、「違法とはそれだけではなく“悪い心”という主観面のことも言う」つまり「悪い心による行為があつて悪い結果が生じていることが違法なのだ」と考えると、Bに狙われていることに気づかずにBを殺したAには悪い心があるから正当防衛を認めるべきではなく有罪という結論になってくる。我が国の判例は後者だと言われています。

このように外形的には同じようなことでも、前提次第で結論が変わることがあります。Bから話を聞くことはできませんが、Aの話や目撃者・関係者の話、現場の状況、その他色々な証拠を総合して、Aは単純な殺人犯なのか、それとも正当防衛で無罪なのか、はたまた偶然防衛であるから元に戻って殺人罪で有罪なのか考えていくことになります。

その見極めを被告人の立場から行っていくのが弁護人の大きな仕事と言えましょう。特に人の話というのは完全に一致することは先ずありません。芥川龍之介の「藪の中」という作品をご存知でしょうか。

「羅生門」の名で映画化されましたが、一つの殺人・強姦事件をめぐる、色々な人がそれぞれ食い違った証言をする作品です。現実もそんなものなのです。皆の言うことが一致している方が逆に要注意です。

人は嘘も言うし、嘘でなくても記憶は概していい加減なものです。果たして何が真実なのか、証人に虚偽はないのか、検察官と反対の立場から吟味するのが弁護人の大きな仕事です。

もっとも弁護人は常に有罪・無罪を争うものではありません。有罪は認めるが刑を軽くして欲しいと嘆願することもあります。これを情状弁護といいます。

たとえば、ある所にCという男がいて知人のDを殴って大怪我をさせてしまった。本人も大いに反省しているが、犯行の動機はDがCの妻に手を出したからだった。こんな話もよくありそうです。Dが自分の妻と不倫していたからといっても、Cの行いは正当防衛にはなりません。

ただ、Cの犯行動機には妻とDの不倫があり、Dにも落ち度があるということを示すことは主張することになるでしょう。同時に弁護人は、それでも人を殴ってはいけないのだとCに反省を促し、Dに対する治療費や慰謝料の支払いを調整する。またどうすればCが過ちを繰り返さないか、不倫をした妻も反省しているのであればCが社会復帰をした後の生活や就労環境、さらには夫婦関係の修復にも目を向けることになるでしょう。誤解されがちですが、弁護士が世の中の価値観の逆を行っているわけではありません。仕事を離れれば、ごく平凡な庶民です（少なくとも私は）。世の中から犯罪や被害者というものがなくなって欲しいという気持ちは、検察官や裁判官と同じなのです。

ですので、特に情状弁護の時は、場合によっては検察官の協力を仰ぎ、検察官も積極的に協力してくれることもあります。人同士が言い争っている様子を見る方が物語としては面白いので、テレビドラマでは検察官と弁護人の激しいバトルが描かれがちですが、実際には起訴事実と争いなく情状弁護が中心となる事案の方が圧倒的に多いです。

このように、弁護人は事案に応じて時に検察官と対立し、何が真実であるかを争い、時に協力して再犯の防止や被害回復に努めます。

私がある人の弁護人を引き受けた時のことです。この方は少し困った方で、接見に行くたびに色々な注文を頂きました。それでも本人は起訴事実を否認していたので、何が真実かを見極めるために検察官の提出した「証拠」をよく眺めました。「証拠」を見ないと事件については何も言えないはずだからです。

特に供述証拠を見ていると、私は関係者が述べる事実と真実（リアリティ）を感じないと思い、自信がわいてきました。しかし一方で被告人の注文がやむことはなく、何故弁護をしているのだと思えてしまいました。このとき私の頭をよぎったのは、本日のお題「弁護士は、なぜ悪い人を弁護するのか？」です。

その時、私が出した答えは二つあります。

一つは「弁護士は適正な手続のために欠かせない存在だから」です。憲法31条は適正手続を保障していると言われていますが、何が適正かを考えると、「疑いをかけられた人の立場に立って言い分を伝えてくれる人がいること」が適正ということではないでしょうか。

戦前の刑事裁判では、裁判官の横に検察官が座っていて二人とも黒い法服を着ていたそうです。この二人の役人が被告人を一方的に取り調べて真相を究明していくというスタイルです。弁護人がいないわけではないですが、弁護士が裁判官に呼び捨てされていた時代もあったようです。

しかし、こんな裁判では真実は分からない。無罪推定といって、起訴された段階で被告人は有罪と決まったわけではありません。検察官が言っているから正しいという訳ではないのです。真実を見通せる人などいないのであって、真実は異なる立場の者が議論を戦わせることで見えてくる。裁判の一翼を担う弁護人が責務を全うすることで「真実」が分かり、「適正」が実現すると思うのです。だから、弁護士はどんな人でも弁護するし、弁護人なしで裁判をしてはいけないのです。

もう一つの答えは「弁護士が努力することによって被告人の更生が期待できるから」です。もし弁護人がいい加減に弁護をした時に、被告人は判決に納得ができるでしょうか？納得できないでしょう。彼は納得ができないまま刑務所に入ることになり、そのような状態で更生が期待できるとは思えません。

もし不本意な判決を言い渡されたとしても、自分は言いたいことを言い尽くし、自分のために最善を尽くした弁護人が傍にいたのだと分かってもらえたのであれば、結論は仕方ないと気持ちを切り替えて更生の道を歩めるのではないかと。また、最初から被告人が罪を争っておらず不貞腐れていたとしても、そんな自分でも最善を尽くしてくれた人がいたのだと分かってくれば更生のきっかけになるのではないかと。だからたとえ無茶苦茶な言い分であっても、悪態をついても、なるべく被告人に寄り添って弁護する

ことが再犯をなくし平和な社会にするための一端になるのではないかと。そう信じて弁護をするのだと思います。

以上まとめると、弁護士は手続の適正に欠かせない存在であり、その努力が被告人の更正にかかわるから、たとえ悪い人であっても弁護するというのが私の考えです。小さいけれど大切な社会の歯車だと思います。もちろん弁護人だけではなく、検察官・裁判官3者が揃って適正なシステムが出来上がることも忘れてはなりません。

先ほどの事件、結論としては私の見立てどおりとなりましたが、法廷では検察官とかなり対立し、勢い余って強く言い過ぎ途中で検察官の手が震えていたのを覚えています。でも、事件が終わってしばらくしてその検察官とお会いした際に、「先生あのときは凄かったです。参りました。」とにこやかに声をかけてくれました。私は心を打たれ自分が恥ずかしくなりました。法廷では激論を交わしますが、適正な裁判のために仕事をしている点は同じです。全人格をかけて口げんかをするのが仕事ではありません。それ以来、意見が違っても敬意を忘れないように、職業人として心がけるよう肝に銘じた次第です。自分の成長のために弁護をしているというのも最後に付け加えようと思います。

出席報告

植山 和人 出席委員

会員数	46名
出席者数	25名
出席算定会員数	36名
出席率	67.57%

前々回出席者数	26名
前々回出席率	68.42%